

長年にわたり道路の美化に貢献

口内町荒町

大泉 俊さん

国土交通省は毎年、道路交

通の安全や道路の清掃などに
多年にわたり功績のあった民
間の団体・個人に対して、感
謝状を贈り表彰しています。

平成20年度は全国で団体69
件、個人19件が表彰され、そ
の中に北上市から大泉俊さん
(85歳)が選ばれました。昭和
43年ころから現在までのほと
んど毎日、約40年間にわたる
道路の除草やごみ拾いなどの
美化活動がたたえられたもの



です。

「当たり前のことをしてい
たつもりです。何といっても
きれいになるとさっぱりして
気持ちがいい。もう一つ、あ
と一つと拾ってしまう」

犬の散歩中、目に付いたご
みを拾ったのが最初。「一つ
拾い二つ拾いしているうちに
癖になった」と話します。ご
みを拾いながらの犬の散歩は
次第に長い距離に。ごみを積
む一輪車も押しながら、最盛

期には東は万歳寺、西は東陵
中学校付近、北は花巻市境ま
で歩いていました。

お供した愛犬はトラ、ドラ、
ララの3代にわたります。2
代目のドラは散歩中に交通事
故に遭い、尾を切断するけが
をしたことも。ハブニングは
ほかにも多々あり、滑り止め
用の「砂箱」の中のごみを取ろ
うとしてハチに刺されたこと
もあったそうです。

一方で、時には通りかかっ
たトラックの運転手さんから
「お疲れさん」と缶コーヒーを
手渡されたり、子どもたちが
一緒に歩いてくれたり。妻の
トキさんは「そういうことも
励みになって長く続いたので
は」と思い返します。

最近目は、耳や足が悪くな
ったこともあり、自宅近所を
犬は連れずに散歩しています。
「道路にごみを捨てる人は今
もいる。自然体で続けたい」
と穏やかな笑みで話してくれ
ました。

数字に見る北上 ⑤

北上のアメダス(芳町・橋本児童公園内)で観測した、年間冬日の平均日数(1979~2000年)です。冬日とは最低気温が0度未満となった日のことです。

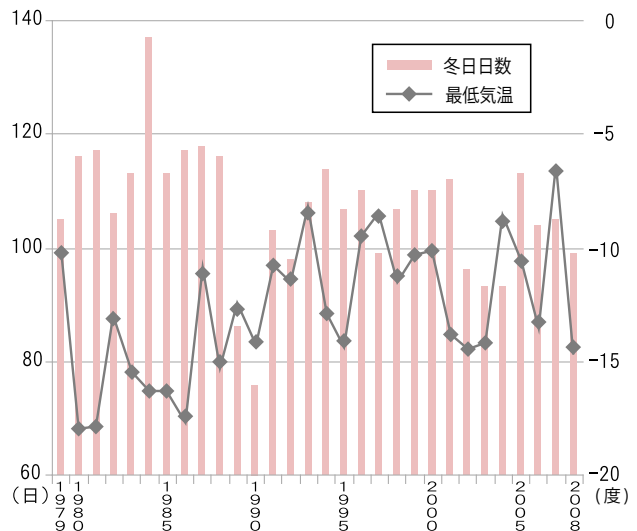
県内の比較できる32地点中では、最も多い藪川が183日。そのほか、盛岡124日、江刺115日、一関109日などで、最も少ないのは大船渡で94日。北上は4番目に少なく、県内の中では冬の朝の比較的暖かい所といえそうです。

また過去30年間の変化(棒グラフ・左目盛)をみると、減少傾向であることがわかります。年の最低気温(折れ線グラフ・右目盛)も上昇傾向で、強く冷え込まなくなっています。これは地球規模での温暖化の進行に加え、都市化の進展に伴うヒートアイランド現象も影響しているのではないかと考えられます。

108日



北上の年間の冬日日数と最低気温 (気象庁調べ)





中央図書館 ☎ 63-3359
 江釣子図書館 ☎ 77-2215
 和賀図書館 ☎ 72-2322

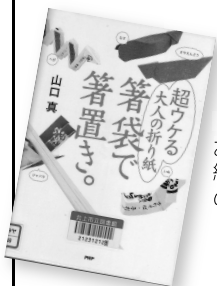
きたかみ物産館

ポリユームたっぷりの逸品
大厚揚げ



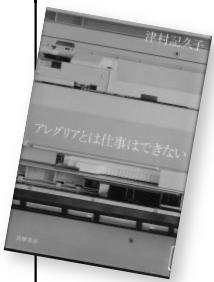
美智子妃誕生と昭和の記憶	清宮 由美子
〈図説〉直江兼統	火坂 雅志
自殺したらあかん!	茂 幸雄
100歳になった介助犬	藤原 嗣治
いのちのバトン	日野原 重明
昂	谷村 新司
天国と地獄	赤川 次郎
オリンピックの身代金	奥田 英朗
宇宙人からの贈りもの	橋 幸夫
TAP	グレッグ・イーガン

《1月の新着本から》



『箸袋で箸置き。』
 山口 真 著
 PHP研究所

はし袋で作るはし置きや、お札で作るポチ袋などの折り紙の本です。難易度☆1~3の表示があります。



『アレグリアとは仕事はできない』
 津村 記久子 著
 筑摩書房

言うことを聞かない1台の複合コピー機。そこから社内の人間関係が微妙になってくる...というお話ほか1編。

ダイコク食品

本通り1-3-30
 ☎63-2519

▶▶ 34



高瀬 雄一 さん

無添加で仕上げた自然食
 材料の大豆は北上産。添加物を加えない製造方法を編み出し、一つ一つ気持ちを込めて作っています。豆の力だけで大きくふくらむので、自然のパワーも一緒にいただくことができそうです。
 薄く切って焼き、しょうゆに七味やネギを添えてどうぞ。味がしみやすいので、甘辛煮でじっくり煮込むとジューシーになります。

散歩道

104

北上市長 伊藤 研

お正月

年末から咲き出した山茶花の花が、雪をかぶって緑と紅白のコントラストが美しい。ウメモドキも南天も実が赤く色付いている。赤は祝いの事の色、お正月にふさわしい。

毎年年末にウメモドキの実をついばみにやってくる鳥たちを追い払う機会も少なく、いつもの年よりも実は多く残っている。鳥たちの季節感や生態系がずれているのだろうか。雪のない晴天の穏やかなお正月、早くも水仙や福寿草も小さな芽を出している。年の始まりだけに気になる自然の季節感は、ずれていないようである。

穏やかな新年を迎え家族で「おせち」をいただき、今年一年の安寧を祈願する。孫たちもそろっての食事はにぎやかである。父や

母が必ず話していたように、じいじとばあばは豆、昆布などの「おせち」の解説をする。「どうして?」「ふーん?」と言いつつ気に入ったものから食べている。孫たちは一人のときは気に入ったものしか食べないが、いとこが集まると嫌いなものでも競って食べるから面白い。

じいじは恒例によりお年玉を進呈する。小さな孫たちは正直である。あまり意味も分らないだろうが、すぐに袋を開けて中身を確認しようとしては「駄目よ、貯金して後でいいもの買おうね」と親たちに回収される。これも毎年の風景である。家長としての責任を果たしたつもりでじいじは満足げにうなずいた。これもまた毎年のことである。

庭に出て再び、山茶花の花を見て「ささんかの宿」の一節を思い出す。「曇りガラスを手で拭いて、あなた明日が見えますか?」うーん、少し先が見えないな、穏やかな年であって欲しいと念じる。これもまた毎年のことであるが今年は何に